

ないため、判定できないと考えられる。

こうした観点から鑑みるに、判定を行った医師らは、各事案において自己をその状況に置いて判断していることが想定され、こうした仮定に基づけば、ノンテクニカルスキルに関する明確な理解と判断を行いうるだけの相応の情報が提示されうれば、ノンテクニカルスキルに関するより正確な抽出、判定が期待しうると考えられる。

E. 結論

本研究は、一般に公開されている医療事故報告書を分析対象として、検討を行い、その要因としてノンテクニカルスキルが同定しうるものであるかどうかという点を明らかにすることを目的としたものであるが、検討の結果、非常に限定された情報しか示されていない事故報告書を用いても、一定の割合で事故要因としてノンテクニカルスキルを同定することができたといえる。

さらに判定者が個別事案に内在的な形で自己を投影し、その内容に関する判定を行っている可能性があるとの仮説に基づけば、ノンテクニカルスキルへの理解を高め、適切な情報が示されれば、個別事案におけるノンテクニカルスキルのよりの確かな判定が可能になると考えられる。

ノンテクニカルスキルは、我が国においても医療事故要因として重視していかなばならない重要な論点であるといえるのであるが、ただし、今回の検討においては、ノンテクニカルスキルを同定するための人材および情報面での何らかの仕組みづくりが必要であることが明確となったと考えられる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- ・相馬孝博：特集 医療の安全と質 臨床現場での医療安全・質管理の教育. 日本内科学会雑誌 101(12):3484-3490,2012
- ・相馬孝博：手術室の患者安全—総論(ノンテクニカルスキルの観点から見て)—. 麻酔増刊(61): S183-188, 2012
- ・小松原明哲：レジリエンスによる事故を避ける：機能共鳴型事故を巡って. 人間工学会関東支部第 43 回大会講演集, 25-26, 2013.
- ・青木貴哉, 浦松雅史, 相馬孝博：The Joint Commission の警鐘事象情報に学ぶ. 病院 72(1): 50-55, 2013
- ・相馬孝博：医療事故を防ぐには. 心臓 45(9)1197-1198,2013
- ・相馬孝博：医療安全からみたノンテクニカルスキル オーストラリア・ニュージーランドの外科医養成プログラムからみた具体的な問題行動. 臨床外科 68(7)764-772,2013
- ・Kaneko T, Nakatsuka A, Hasegawa T, Fujita M, Souma T, Sakuma H, Tomimoto H: Postmortem Computed Tomography is an Informative Approach to Determining Inpatient Cause of Death but Two Factors Require Noting from the Viewpoint of Patient Safety. JHTM1:1-9, 2013
- ・竹村敏彦, 浦松雅史, 相馬孝博：東京医科大学における医療安全意識の経年比較分析. 東医大誌 71 (4) : 363-375, 2013

2. 学会発表

- ・相馬孝博：患者中心の医療安全-自他ともに見つめ直す外科医の振る舞い-. 第 74 回日本臨床

- 外科学会総会特別講演（東京）. 2012年11月30日
- ・相馬孝博：WHO患者安全カリキュラムを現場教育に生かす.第7回医療の質・安全学会学術集会特別講演（埼玉）. 2012年11月23日
 - ・相馬孝博：医療事故を防ぐには. 第60回日本心臓病学会学術集会特別講演（金沢）. 2012年9月14日
 - ・相馬孝博：手術室の医療安全. 第29回日本呼吸器外科学会総会安全セミナー（秋田）. 2012年5月17日
 - ・相馬孝博：安全推進のための院内レベルのピアレビュー. 第112回日本外科学会定期学術集会特別講演（千葉）. 2012年4月13日
 - ・相馬孝博：呼吸器外科医のノンテクニカルスキル, 第30回日本呼吸器外科学会 安全教育セミナー, 2013年5月9日, 名古屋（特別講演）
 - ・相馬孝博：WHO患者安全カリキュラムガイド多職種版について, 日本薬学協議会, 2013年6月28日, 東京(特別講演)
 - ・相馬孝博：世界標準の患者安全教育－WHO患者安全カリキュラムガイド多職種版から学ぶ. 第32回日本歯科医学教育学会, 2013年7月13日, 札幌(特別講演)
 - ・相馬孝博：世界標準の患者安全教育－WHO患者安全カリキュラムガイド多職種版から学ぶ, 第45回日本医学教育学会, 2013年7月26日, 千葉（モーニングセミナー）
 - ・相馬孝博：医療安全の基礎, 医療・病院管理研究協会, 2013年8月23日,（特別講演）
 - ・相馬孝博：世界標準の患者安全教育－WHO患者安全カリキュラムガイド多職種版から学ぶ. 第36回日本高血圧学会総会医療倫理・医療安全講習会,2013年10月24日, 大阪（特別講演）
 - ・相馬孝博：WHOカリキュラムガイドに学ぶノンテクニカルスキルの重要性, 第8回医療の質・安全学会学術集会, 2013年11月23日, 東京（共催セミナー）
 - ・相馬孝博：安全対策と感染対策の連携の必要性. 第8回医療の質・安全学会学術集会, 2013年11月23日, 東京（シンポジウム）
 - ・相馬孝博：WHOカリキュラムガイドの医療専門職の基礎教育への活用, 第8回医療の質・安全学会学術集会, 2013年11月23日, 東京（ワークショップ）
- H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）
1. 特許取得
なし
 2. 実用新案登録
なし
 3. その他
なし

外科領域におけるノンテクニカルスキルの教育訓練プログラム開発と
その評価システムの構築に関する研究
—オーストラリア・ニュージーランドにおける試みに関する検討—

研究代表者 相馬 孝博 榊原記念病院 副院長

研究要旨

オーストラリア・ニュージーランドの外科医養成プログラムにて挙げられた、ノンテクニカルスキルの具体的な問題行動を、医療安全の観点から検討した。医療事故は他領域の事故と同様に、テクニカルスキルよりも、多くはノンテクニカルスキルの問題であり、特に危険因子としての悪い行動パターンは、ほぼ世界共通であることが判明した。外科医は、手術の施行にとどまらず、自らなす手術の客観評価を常に行い、診療チームの中でのリーダー的役割を果たし、組織運営に関わり、次世代育成も視野に入れなければならない。自らが外科医として存在するためには多職種協働のチームワークの中で生かされている、という謙虚さが世界的に必要とされているのである。

はじめに

一般的に個人がある業務を遂行する場合のスキル（Skill, 技能）は、その業務に直結した専門的知識や技術（Technical Skill）と、それ以外のノンテクニカルスキル（Non-Technical Skill：以下、NOTS）に分けられる。後者は、各個人の認知（cognitive）スキル、社会性（social）スキル、肉体精神的要因をコントロールするスキルなどである。どの産業領域においても、テクニカルおよびノンテクニカルスキルがあり、航空管制などのハイリスク領域を検討した Flin は、各領域に共通するノンテクニカルスキルとして、状況認識、意思決定、コミュニケーション、チームワーク、リーダーシップ、ストレス管理、疲労への対処を挙げている。

一方、オーストラリア王立外科医会（Royal Australasian College of Surgeons：以下、RACS）は、「外科医の能力と実績に関する行動指標のフレームワーク（Surgical Competence and Performance Guide）第二版」を、2011年に公表した。RACSは、外科医の能力をテクニカルスキルとノンテクニカルスキルを合わせて検討し、以下の9つに分類して、すべての能力面から評価するための枠組みを提示した。外科医が最高水準の実績を達成するためには、これらの能力がそれぞれ同等に重要とされている。

1. 医学の専門知識（Medical Expertise）
2. 臨床判断と意思決定（Judgement & Clinical Decision Making）
3. 専門の技術知識（Technical Expertise）
4. プロフェッショナリズム（Professionalism）

5. 保健活動の擁護 (Health Advocacy)
6. コミュニケーション (Communication)
7. 多職種協働 (Collaboration)
8. マネジメントとリーダーシップ
(Management and Leadership)
9. 学問と教育 (Scholarship and Teaching)

A. 研究目的

各種の領域に事故はノンテクニカルスキルの失敗が多いことが知られるようになり、それは医療も例外ではない。ただし医療の場合、合併症といっても、ある一定頻度で発生してやむを得ないものなのか、特定の医療者に多発しているのか、テクニカルスキル領域にかかる問題点もある。水準の低い医療を提供し続けたとすれば、それはテクニカルスキルの問題にとどまらず、そのような状況を放置した（させた）ノンテクニカルスキルにも重大な欠陥があるといえる。

B. 研究方法

（文献レビューのため倫理面への配慮は不要である）

RACS の作業部会は、外科医の能力について、手術室内の業務にとどまらず全人的な実績を、テクニカルおよびノンテクニカルの観点から再検討して、各能力 9 因子について、3 つの重要な「行動パターン (Patterns of Behaviour)」を同定した (図 1)。良い行動パターンは、外科医の指針となるものであり、研修医や他の外科医にとってのロールモデルとなりうるが、一方の悪い行動パターンは、実績が不十分というだけでなく、患者安全が脅かされ、医療事故の温床となりうる。悪い行動はいずれも極端な例示であることを断っているが、RACS が示した、すべての悪い行動パタ

ーンについて、日本の臨床現場の現状に合わせて解説する。

C. 研究結果

1. 医学の専門知識

1-1) 医学的知識と技能を実証する：悪い行動パターン

- ・不適切または不必要な検査を指示する
- ・外科的な実績が不十分であることが患者の安全や転帰に直接及ぼす影響を正当に評価しない
- ・明確な術後計画を確実に立てることができない
- ・術後の合併症やその疑いがある状況に対して迅速かつ適切に対処できない

1-2) 診療内容をモニターして評価する：悪い行動パターン

- ・ピアレビュー会議に定期的に参加しない、自身の業務成績について監査を受けない
- ・明らかな誤りがありながら、悪い結果を他者のせいにする
- ・自身の業務成績を他者や広く合意された基準と比較しない
- ・診療現場に導入された変更を評価しようとならない

1-3) 安全とリスクを管理する：悪い行動パターン

- ・臨床的評価で早急な判断を下し、重大な問題（抗凝固薬の使用など）を見落とす
- ・備品や機器類の不足や安全な使用のための準備不足を把握していながら手術を開始する
- ・院内や手術室で行われる安全チェックリストの確認に参加しない

- ・インシデント報告システムを無視する

このカテゴリーは、テクニカルスキル領域であるが、ノンテクニカル要素も多く含まれている。すなわち検査の不適切指示や、あいまいな術後計画は、テクニカルスキルの欠如といえるが、チーム医療を行っている限り、患者に実行される前に修正されることも多い。こうした行動は、外科医として未熟である場合に少なからずみられるものの、周囲の意見を良く聞くことにより、自らの実力不足を補うようになれば改善されてゆく。若くても人の話に耳を傾けない人間が、不適切指示を出した場合、周囲はそれを指摘せず黙って修正するようになってしまい、そうした人間は自ら成長の機会を逸することになる。

ピアレビューによる検討は、多くの医療組織では術前検討など、主に治療の適応を巡っての検討が行われている。また伝統ある教育病院など、信頼される医療組織では、死亡患者症例検討や臨床病理検討会などの仕組みがあるが、近年は病理解剖数の減少も相まって、こうした検討会が少なくなっている。自らが執刀した症例についての検討には、それなりの経験年数が必要になるが、自らなした手術の結果の検討を怠れば、合併症という言葉に逃げ込んで、より高水準の医療を提供できなくなるであろう。

また忙しい臨床現場で、抗凝固薬の使用や機器の準備のチェックを忘れることはありうるが、多職種協働によりエラーの連鎖は止められる。ただしこのような行動は、単発の「抜け」なのか、常態的なのかが問題である。インシデント報告システムに日頃から参画するような医師であれば、前者の場合は修正されていく。しかし後者の場合の多くは、インシデント報告もせず、手術室の安全チェックリストもないがしろにするため、たとえ

地位が高くても、組織の足を引っ張る存在なのである。

2. 臨床判断と意思決定

2-1) 選択肢を考慮する：悪い行動パターン

- ・代わりの選択肢を議論も検討もしない
- ・チームの他のメンバーに意見を求めない
- ・十分な議論を行わず、選択肢や意思決定の根拠を確実に記録しようとしめない
- ・新たな情報や代替策が判明しても、すでに決定したことを変更しつづける

2-2) 前もって計画する：悪い行動パターン

- ・術前の準備を検討せず、自身で行おうとしない
- ・手術計画に手術室スタッフや関連のある他の臨床スタッフを参加させず、考慮しつづける
- ・術後計画でその患者に特有の併存症を考慮に入れない
- ・手術に必要な特別な器具、機器、インプラントについて手術室スタッフに情報を伝えることを怠る

2-3) 決定事項を実施してレビューする：悪い行動パターン

- ・決定事項を遂行できないことが頻繁にある
- ・同じエラーを何度も繰り返す
- ・代わりの対応策が妥当であるとの証拠があっても柔軟に対応できない
- ・早急に決定を下し、たとえ時間に余裕があっても、決定事項を再検討しない

この臨床判断は、テクニカルスキルとノンテクニカルスキルの境界領域である。治療の選択にあたっては、すべての選択肢を考慮しなければならないが、不作為（意図的にやらないこと）や自分

の興味や好き嫌いによる独善的な決定は、他の因子のプロフェッショナリズムや保健活動の擁護にも抵触する。前もっての計画を怠ることも同様であり、こうした行動は、治療や手術について決定権のある経験者の段階で見られる。指導的地位のある人間がこのような行動をとると、チームの中で学ぶ次世代の悪い見本となる。決定事項を遂行できなかつたり、同じエラーを繰り返すことは、意図的でないにせよ、患者安全を脅かすことになる。

3. 専門の技術知識

3-1) 手術が必要かどうかを認識する：悪い行動パターン

- ・外科的処置によらない選択肢を十分に考慮することなく、外科的手技ばかりに注目する
- ・患者の状態を無視して、侵襲性の高い不適切な手技を選択する
- ・患者の診断や現状を考慮すれば時期尚早あるいは不適切と考えられる手術を施行する
- ・あらゆる決定において正当性に関する議論を行おうとしない

3-2) 器用さと技術を維持する：悪い行動パターン

- ・細部に対する配慮や注意の必要性を顧みずに、性急に手技を進める
- ・事前に十分な評価と協議を行わずに、新しい技術や手技を導入する
- ・加齢や身体的障害が手先の器用さや手術操作に及ぼす影響を認めようとする
- ・手術器械や機器の取り扱いに無頓着である

3-3) 自らの業務範囲を確定する：悪い行動パターン

- ・他者から支援を受けた方が明らかに有益な状況でも、自分だけで行おうとする
- ・適切な紹介を行わない、紹介する時期が適切でない
- ・外科医としての自身の能力を正しく把握しておらず、別の場所で行った方がよい手技を施行する
- ・別の医師がいるにもかかわらず、自身が受けた訓練の範囲外の症例に対応しようとする

専門の技術知識は、テクニカルスキルそのものであるが、自らの興味に基づく独善的な行動は、患者にとっての最善の医療を逸することになる。ある手技を自分が得意としている場合、治療の適応を自分に都合の良いように拡大し、得意手技の対象としてしまうことも同様である。テクニカルスキルの未熟さは、努力と修練によって改善される可能性があるが、人の言うことに耳を傾けない行動は、後述の多職種協働とチームワーク領域のノンテクニカルスキルの欠如といえる。また道具を大切にしない行動は、それまでの人生で培われてきた生活習慣の一部と考えられ、是正するには、本人の強い意志が必要である。

4. プロフェッショナリズム

4-1) プロフェッショナルの自覚と見識を持つ：悪い行動パターン

- ・術後に連絡が取りづらくなり、患者への対応をスタッフ任せにする
- ・不良な転帰の責任を研修医など自分以外のスタッフに押しつける
- ・不当に長いリストで予定を入れる、手術室スタッフや麻酔医に手術時間を誤解させる

- ・自分より地位の低いスタッフを叱りつけたり恥をかかせたりする

4-2) 倫理的であり誠実である：悪い行動パターン

- ・医療給付，保険，第三者または労働者補償などの支払いに関して不審な請求を行う
- ・研修医，スタッフ，患者に対して威圧的な態度をとったり，いやがらせをしたり，性差別的な言動を示したりする
- ・公共の場で患者の詳細な情報を話し，秘密保持の原則に違反する
- ・プロフェッショナルとしての自身の規律違反を患者に責任転嫁しようとする

4-3) 自らの健康と生活を維持する：悪い行動パターン

- ・当直時や待機手術の施行前に無分別に飲酒する
- ・処方薬を乱用する，違法薬物を使用する
- ・普段から不機嫌な態度を示す，落胆を隠さない
- ・体調不良や過度の疲労が外科医としての実践に影響を及ぼしている場合でさえ「頑張ろう」とする

このプロフェッショナルリズムのカテゴリーは、医療を天職とするものではなく、医療以外の領域のプロフェッショナルにも共通のものである。別の言葉で言えば、社会人としての基本素養であろう。責任ある仕事を放棄したり、自信の都合で手術リストを作ることは、単なる自分勝手であり、さまざまなハラスメント・反倫理的行為・守秘義務違反は、どの職業領域においても排除されている。また個人の精神的肉体的コントロールも、働く場所で自らが最も良い状態で参画しなければ、業務遂行能力に影響することは明らかである。

本来の医療プロフェッショナルリズムは、RACSの掲げた外科医の9つ能力のすべてが関わっていると考えるべきである。ちなみに2002年に米国内科専門医会・米国内科学会・欧州内科学会が共同作成した「新ミレニアムの医療プロフェッショナルリズム」では、プロフェッショナルとして10の責務が規定されている。プロとしての能力維持、患者への正直さ、守秘義務、適切な患者関係の維持、医療の質向上、医療アクセスの向上、医療資源の適正配置、科学的知識、利益相反の開示、専門職としての責任を果たすこと、が提示されており、医療職が集団としてなすべきことも挙げられている。

5. 保健活動の擁護

5-1) 患者に共感し患者権利を尊重する：悪い行動パターン

- ・インフォームドコンセントのプロセスを経験の浅い若手医師に任せる
- ・患者に対する共感や配慮に欠けている
- ・自尊心やプライバシーの面で患者のニーズを顧みない
- ・特に感情的に負荷がかかる状況などでも、患者に接する時間を十分に確保しない

5-2) 患者・介護者・家族と交わる：悪い行動パターン

- ・適切な理由なく突然、手術の予定をキャンセルする
- ・困難な問題への対処を避けるために、不適切な形で若手スタッフに業務を委任する
- ・患者の身体障害や認知障害を考慮すると不十分な評価しか行わない
- ・手術を待っている患者に悪影響を及ぼす問題を継続的に追跡しようとしな

5-3) 文化的・地域的な要請に応える：悪い行動パターン

- ・意思決定に対するコミュニティの影響を軽視する
- ・コミュニティ内にある取り決めに関心を示さない
- ・患者が持つ多様な背景や社会的または文化的な信条・態度に鈍感である
- ・文化、民族、宗教によって相手を差別する専門的な事柄を、一般人にわかりやすく説明していくことは、(医療に限らず) その専門領域の必要性を社会に認めってもらうために、非常に重要である。外科医が目の前の手術患者にしか考えが及ばないのは世界的傾向であるようで、患者のみならず、介護者や家族、そして地域や社会にまで視野に入れる必要がある。文化・民族・宗教的背景は、患者安全に直接影響することは少ないものの、社会的背景に対する配慮を欠いたまま放置しておく、医療事故が発生した場合には、患者側の感情を悪化させて、さらに拡大する恐れがある。ちなみに WHO (World Health Organization, 世界保健機関) が、2011 年にすべての医療系学生を対象とした「患者安全カリキュラムガイド多職種版」を公開したが、その中では、ヒューマンファクターを理解し、組織の一員として行動し、社会活動にも加わることが重要であると説かれている。

6. コミュニケーション

6-1) 情報を収集し理解する：悪い行動パターン

- ・コンサルテーションや手技に関連した情報の収集とレビューを行わない
- ・コンサルテーションや手技を行うときまで検査結果の検討を行わない
- ・発生しうる問題について議論しない

- ・手技の実施中にカルテから読み取れる情報を何度も尋ねる

6-2) 選択肢について話し合っただけで伝える：悪い行動パターン

- ・患者やチームと関わりを持たず、手術の計画と見通しを伝えようとしない
- ・計画に対して疑問が投げかけられると、攻撃的になったり無視したりする
- ・自分で対応できない場合に、進行中の患者ケアに関連する重要な問題や計画を同僚やスタッフに伝えない
- ・慌ただしく意思決定を行った後、困難な問題に直面して苛立ちや攻撃的態度あるいは一貫しない対応を示す

6-3) 効果的なコミュニケーションを行う：悪い行動パターン

- ・スタッフや患者に対して無作法に振る舞う
- ・患者との話し合いで難解な専門用語を頻繁に使用し、患者が十分に理解しているかどうかを確認しない
- ・日頃から患者、家族、同僚、スタッフの意見をさえぎったり簡単に却下したりする
- ・言語、文化、障害がコミュニケーションに与える影響を正しく認識していない

コミュニケーションは、ノンテクニカルスキルの典型である。ここでは外科医同士、チーム、他科の医師、他職種のスタッフ、患者や家族など、外科医が職務に関わるすべての人間とのコミュニケーションが説かれている。一般的にはコミュニケーションとは、情報の伝達を中心として意思の疎通や情動の共感をも含む概念である。本カテゴリーにおいては、情報の送り手が誰に対して何を発信し、情報の受け手からどのような応答があったかという過程において、どのような情報が共有

されたかが問題となる。特に医療者と非医療者の場合は、情報の非対称性（専門職側が一方的に圧倒的情報を持っている状態）を意識して、その差をできるだけ埋めるようにして伝達する必要がある。

そもそも人間関係は、言葉や記号の交換によって成立しているため、他者に伝えることのできる情報は、言語化されたものだけである。情報を漏らさず正確に伝達するためには、口頭にせよ文書にせよ、明確に言語化がされる必要がある。米国の医療機能評価機関である Joint Commission は、患者安全目標の中の「医療者間コミュニケーションを有効にするハンドオフに関する細則」で、「そのための時間を確保し、最新情報を交換し、復唱などにより確実にし、他情報も参照しつつ、中断させないこと」を挙げている。ハンドオフとは、情報とともに責任も受け渡す行為であることを、送り手も受け手も認識しなければならない。

7. 多職種協働とチームワーク

7-1) 情報交換し記録する：悪い行動パターン

- ・チームのメンバーや業務スタッフの見解や意見に耳を貸さない
- ・チームのメンバーやスタッフの助力を供給しているが、何を求めているかを明確にしない
- ・他者の臨床的な意見を無視した行動をとる
- ・患者を紹介してきた医師になかなか情報を提供しない

7-2) 相互理解を確立する：悪い行動パターン

- ・定期的な病棟回診を行わない、患者の経過に関するグループ討論やレビューを行わない

- ・実施する手技のリスクまたは進捗について麻酔科医への情報提供を怠る
- ・術後管理についての話し合いやレビューを歓迎しない
- ・病院職員や医療スタッフの提案や意見を考慮に入れない

7-3) 診療チームにおいて能動的な役割を果たす：悪い行動パターン

- ・全員の準備が整っていることを確認せずに、手術を開始する
- ・医療チーム内の不調和や対立を助長する
- ・手術室が使用できる時間に合わせてリフトを削減するよう要請されても協力しない
- ・コンサルテーションの予定が変わったことをスタッフに伝えない

本カテゴリーは、コミュニケーション領域のなかで、対同業外科医と対患者を除いた、チーム活動の行動パターンであるが、内容的には、プロフェッショナルリズムとも重なる領域である。手術室を好きなように使用するなど、自分に都合の良いことばかりを優先させるなど、独りよがりの行動が挙げられている。医師以外のスタッフのいうことに耳を貸さないだけでなく、麻酔科医などへの情報提供を怠る行動も、他の職種への敬意を欠き、自分が多職種の中で生かされていることがわからない。またこうした外科医ほど、自分の悪い性癖が明らかになるかもしれないので、ピアレビューなどの客観評価を嫌う傾向にある。

8. マネジメントとリーダーシップ

8-1) 指針を定め維持する：悪い行動パターン

- ・確立されている適切な基準やプロトコルに無視する
- ・患者やスタッフを軽視する

- ・他の臨床分野の同僚が示す意見や懸念を軽視する
- ・組織の秩序を乱し、信頼性に欠け、連絡が取れなくなることが多く、遅刻を繰り返す

8-2) 他の人を鼓舞するように導く：悪い行動パターン

- ・プレッシャーのかかる状況では途方に暮れてしまい、意思決定ができなくなる
- ・予期しない技術的な理由で他分野の専門技能が必要になった場合にも、直ちに助力を求めることを躊躇する
- ・エラーが起きると他者を非難し、自分は責任をとらない
- ・プレッシャーのかかる状況では不合理な行動をとったり、何度もまたは不適切に怒り出す

8-3) 他の人を支援する：悪い行動パターン

- ・適正に遂行された業務を認識せず、フィードバックを与えない
- ・チームの他のメンバーのニーズを把握せず、支援を提供しない
- ・同じ立場の医師に対して敵意や対抗意識を持ち、同僚に対して公然と批判的な態度を示す
- ・若手の医療スタッフ、看護師、その他の医療専門職に対して、再三にわたって否定的な態度を示す

これもノンテクニカルスキル領域の典型であり、遅刻やプレッシャーがかかった状況での意志決定などの自己マネジメントが含まれ、必要に応じて他者の助力を仰げないのも、同様の行動パターンである。外科医は、最も侵襲的な処置を行うものとして、診療チームの中でリーダー的存在とならざるを得ない立場にあるが、他者を公然と非難し

たりする態度は、診療チームの結束の存続を危うくする。特に素直に他者の助力を仰げない外科医は、患者安全を脅かす存在である。術中のテクニカルスキルにおいて、自らの守備範囲を過信して、初期消火で済まずに大火事になってしまった医療事故は数知れない。ノンテクニカルスキルを上手に発揮することにより、テクニカルスキルの失敗を補うことができるのである。

9. 学問と教育

9-1) 生涯学習への誓約をする：悪い行動パターン

- ・最新のエビデンスに従って診療行為を調整することができない
- ・最新の文献で発表されたエビデンスを大きく誤解している
- ・論文抄読会、症例検討会、臨床病理検討会などへの参加に興味を示さない
- ・若手スタッフの訓練や育成に無関心である

9-2) 教育し監督して評価する：悪い行動パターン

- ・若手スタッフや学生の研修で傲慢、不作法、無関心な態度を示す
- ・若手スタッフに適切に業務を任せず、支援も与えない
- ・実績が不十分な研修医を特定して改善を図ることをしない
- ・若手スタッフに対して過度の期待を抱いたり、必要以上に批判したりする

9-3) 外科の業務を改善する：悪い行動パターン

- ・外科分野の承認を受けた研究プロジェクトへの参加を拒否する、あるいは非協力的な態度を示す

- ・裏付けとなる根拠が欠落しているにもかかわらず、「私には有効であるから正しいはずだ」という論理で特定の手法を推奨する
- ・臨床試験を実施したり新しい術式を評価したりする際に、研究や倫理に関する承認要件を無視する
- ・革新的な手技や新しい手技を行う場合に、患者からインフォームドコンセントを取得しない、あるいは適切なフォローアップを実施しない

本カテゴリーも、プロフェッショナリズムとリーダーシップ領域とかなり重複がある。指導的地位にある人間ばかりではなく、若手のメンターとなる中堅クラスも対象となる。どの外科医も駆け出しの頃は何も出来ず、多くの先輩の指導に導かれて、一人前になっていくものであるが、育てて頂いたお返しは次世代に向けられなければならない。たとえ自分が十分な教育を受けさせてもらえなかったとしても、そうした負の体験を若手に向けるべきでない。また自分の興味が向く手術はするが、組織として必要な活動に背を向ける態度は、若手に対しての非常に悪い見本である。そのような独善的行動が許されてしまうと、悪い行動は次世代に再生産されることになる。

D. 考察

人間の技能（スキル）には、専門技術に特化したテクニカルなもの、それ以外のノンテクニカルなものがあり、この二者は言葉の上では排他的であるものの、テクニカルスキルの運用にノンテクニカルスキルが必要な場面は多いので、両者はいわば表裏一体と考えなければならない。

たとえば手術室の利用について、自分の手術を自分の都合で幾つも予定に入れることは、プロフ

ェッショナルリズムの問題として捉えられ、手術の予定変更を打診された際に耳を貸さないことは他職種協働の問題とされている。「患者のために」を錦の御旗にして、自分勝手に手術予定を組む行動は、そもそも組織の一員として働いている意識に欠けており、医師である前に、社会人としての基本ルールの問題であろう。

また一方では、個人のコミュニケーションスキルは、幼少時からの積み重ねで形成されてきているため、上記の不法な振る舞いや、他の人の意見をさえぎる行為は、一朝一夕で改まるものではない。こうした態度は、伝えなければならない言語化情報とは別に、悪い印象として伝わってしまう非言語化情報なのである。筆者の個人的体験であるが、研修医時代に「先生は患者さんの脇に座って話を聞こうとしているが、いつも忙しく走り回っているの、足は廊下を向いている。患者さんはそれを察しているから、先生には長い話を絶対にしません。」と病棟看護師から指摘を受けたことがある。態度というものは、本人の意識していないところで、自然に表れてしまうことを心すべきである。

このように RACS による外科医の悪い行動パターンが数々列挙されたが、これらはすべて日本の外科医にも当てはまり、我がまな外科医の性癖は、ほぼ世界共通と考えられる。外科は、刃物を使う、最もアグレッシブな治療方法である。外科医全体の性格分析が必要となるだろうが、外科を志す人間は、フォロワーというよりも、前に出たい性格が多いと思われ、周囲への配慮を欠けば、たちまち独善的な行動が浮かび上がってしまう。またテクニカルスキルとしての手業（てわざ）が重要であるため、そこに興味が集中するため、「手術さえ上手ければ文句ないだろう」という一

面的な職人気質に陥りやすい。外科医の仕事は手術手技にとどまらず、自らなす手術の客観評価を常に行い、診療チームの管理から、組織運営と次世代育成までに及んでいる。

自らが外科医として存在するためには多職種協働のチームワークの中で生かされている、という謙虚さが世界的に必要とされているのである。

E. 結論

オーストラリア・ニュージーランドの外科医養成プログラムにて挙げられた、ノンテクニカルスキルの具体的な問題行動を、医療安全の観点から検討した。医療事故は他領域の事故と同様に、テクニカルスキルよりも、多くはノンテクニカルスキルの問題であり、特に危険因子としての悪い行動パターンは、ほぼ世界共通であることが判明した。外科医は、手術の施行にとどまらず、自らなす手術の客観評価を常に行い、診療チームの中でリーダー的役割を果たし、組織運営に関わり、次世代育成も視野に入れなければならない。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

- ・相馬孝博：特集 医療の安全と質 臨床現場での医療安全・質管理の教育。日本内科学会雑誌 101(12):3484-3490,2012
- ・相馬孝博：手術室の患者安全—総論(ノンテクニカルスキルの観点から見て)—。麻酔増刊(61) : S183-188, 2012
- ・青木貴哉, 浦松雅史, 相馬孝博：The Joint Commission の警鐘事象情報に学ぶ。病院 72(1): 50-55, 2013

- ・相馬孝博：医療事故を防ぐには。心臓 45(9)1197-1198,2013
- ・相馬孝博：医療安全からみたノンテクニカルスキル オーストラリア・ニュージーランドの外科医養成プログラムからみた具体的な問題行動。臨床外科 68(7)764-772,2013
- ・Kaneko T, Nakatsuka A, Hasegawa T, Fujita M, Souma T, Sakuma H, Tomimoto H: Postmortem Computed Tomography is an Informative Approach to Determining Inpatient Cause of Death but Two Factors Require Noting from the Viewpoint of Patient Safety. JHTM1:1-9, 2013
- ・竹村敏彦, 浦松雅史, 相馬孝博：東京医科大における医療安全意識の経年比較分析。東医大誌 71 (4) : 363-375, 2013

2. 学会発表

- ・相馬孝博：患者中心の医療安全・自他ともに見つめ直す外科医の振る舞い。第74回日本臨床外科学会総会特別講演（東京）。2012年11月30日
- ・相馬孝博：WHO患者安全カリキュラムを現場教育に生かす。第7回医療の質・安全学会学術集会特別講演（埼玉）。2012年11月23日
- ・相馬孝博：医療事故を防ぐには。第60回日本心臓病学会学術集会特別講演（金沢）。2012年9月14日
- ・相馬孝博：手術室の医療安全。第29回日本呼吸器外科学会総会安全セミナー（秋田）。2012年5月17日
- ・相馬孝博：安全推進のための院内レベルのピアレビュー。第112回日本外科学会定期学術集会特別講演（千葉）。2012年4月13日

- ・相馬孝博：呼吸器外科医のノンテクニカルスキル，第 30 回日本呼吸器外科学会 安全教育セミナー，2013 年 5 月 9 日，名古屋（特別講演）
 - ・相馬孝博：WHO 患者安全カリキュラムガイド多職種版について，日本薬学協議会，2013 年 6 月 28 日，東京(特別講演)
 - ・相馬孝博：世界標準の患者安全教育－WHO 患者安全カリキュラムガイド多職種版から学ぶ．第 32 回日本歯科医学教育学会，2013 年 7 月 13 日，札幌(特別講演)
 - ・相馬孝博：世界標準の患者安全教育－WHO 患者安全カリキュラムガイド多職種版から学ぶ，第 45 回日本医学教育学会，2013 年 7 月 26 日，千葉（モーニングセミナー）
 - ・相馬孝博：医療安全の基礎，医療・病院管理研究協会，2013 年 8 月 23 日，（特別講演）
 - ・相馬孝博：世界標準の患者安全教育－WHO 患者安全カリキュラムガイド多職種版から学ぶ．第 36 回日本高血圧学会総会医療倫理・医療安全講習会，2013 年 10 月 24 日，大阪(特別講演)
 - ・相馬孝博：WHO カリキュラムガイドに学ぶノンテクニカルスキルの重要性，第 8 回医療の質・安全学会学術集会，2013 年 11 月 23 日，東京（共催セミナー）
 - ・相馬孝博：安全対策と感染対策の連携の必要性．第 8 回医療の質・安全学会学術集会，2013 年 11 月 23 日，東京（シンポジウム）
 - ・相馬孝博：WHO カリキュラムガイドの医療専門職の基礎教育への活用，第 8 回医療の質・安全学会学術集会，2013 年 11 月 23 日，東京（ワークショップ）
- H. 知的財産権の出願・登録状況
1. 特許取得
なし
 2. 実用新案登録
なし
 3. その他
なし

外科領域におけるノンテクニカルスキルの教育訓練プログラム開発と その評価システムの構築に関する研究

医療安全から見たノンテクニカルスキルの重要性

—オーストラリア・ニュージーランドの外科医養成プログラムにおける推奨行動の検討—

研究代表者

相馬孝博

榊原記念病院

副院長

研究要旨

医療領域のノンテクニカルスキルは、近年重要性を増しており、オーストラリア・ニュージーランドの外科医養成プログラムにおいても、具体的な行動例が挙げられており、その推奨される行動を、医療安全の観点から検討した。医療事故は、他領域の事故と同様に、テクニカルスキルよりもノンテクニカルスキルの問題であることが世界的共通認識になっている。推奨される行動パターンの一つ一つは、一見すると当然のように見えるが、いかなる時でも達成できるものではない。また外科医は、手術の施行にとどまらず、自らなす手術の客観評価を常に行い、診療チームの中でのリーダー的役割を果たし、組織運営に関わり、次世代育成も視野に入れなければならない。自らが外科医として存在するためには多職種協働のチームワークの中で生かされている、という謙虚さが世界的に要請されている。

はじめに

個人がある業務を遂行する場合のスキル(Skill, 技能)には、その業務に直結した専門的知識や技術(Technical Skill)と、それ以外のノンテクニカルスキル(Non-Technical Skill: 以下, NOTS)に分けられることが知られている。後者は、各個人の認知(cognitive)スキル、社会性(social)スキル、肉体精神的要因をコントロールするスキルなどである。どの産業領域においても、テクニカルおよびノンテクニカルスキルがあり、航空管制などのハイリスク領域を検討した Flin は、各領域に共通するノンテクニカルスキルとして、状況認識、意思決定、コミュニケーション、チームワ

ーク、リーダーシップ、ストレス管理、疲労への対処を挙げている。

一方、オーストラリア王立外科医会(Royal Australasian College of Surgeons: 以下, RACS)は、「外科医の能力と実績に関する行動指標のフレームワーク(Surgical Competence and Performance Guide)第二版」を、2011年に公表した。RACSは、外科医の能力をテクニカルスキルとノンテクニカルスキルを合わせて検討し、以下の9つに分類して、すべての能力面から評価するための枠組みを提示した。外科医が最高水準の実績を達成するためには、これらの能力がそれぞれ同等に重要とされている。

1. 医学の専門知識 (Medical Expertise)
2. 臨床判断と意思決定 (Judgement & Clinical Decision Making)
3. 専門の技術知識 (Technical Expertise)
4. プロフェッショナリズム (Professionalism)
5. 保健活動の擁護 (Health Advocacy)
6. コミュニケーション (Communication)
7. 多職種協働 (Collaboration)
8. マネジメントとリーダーシップ (Management and Leadership)
9. 学問と教育 (Scholarship and Teaching)

A. 研究目的

各種の領域に事故はノンテクニカルスキルの失敗が多いことが知られるようになり、それは医療も例外ではない。ただし医療の場合、合併症といっても、ある一定頻度で発生してやむを得ないものなのか、特定の医療者に多発しているのか、テクニカルスキル領域にかかる問題点もある。一定水準以上の医療を提供するためには、それに応じた良い行動（振る舞い）を持続する必要がある。

RACS が提示した 9 つの因子において、患者の安全を向上させる「外科医の各種能力」の例から、ノンテクニカルスキルの重要性を考察する。

B. 研究方法

(文献レビューのため倫理面への配慮は不要である)

RACS の作業部会は、外科医の能力について、手術室内の業務にとどまらず全人的な実績を、テクニカルおよびノンテクニカルの観点から再検討して、各能力 9 因子について、3 つの重要な「行動パターン (Patterns of Behavior)」を同定した。良い行動パターンは、外科医の指針となるもので

あり、研修医や他の外科医にとってのロールモデルとなりうるが、一方の悪い行動パターンは、実績が不十分というだけではなく、患者安全が脅かされる。RACS が示した、推奨される良い行動パターンについて、日本の臨床現場の現状に合わせて解説する。

C. 研究結果

1. 医学の専門知識

1-1) 医学的知識と技能を実証する：良い行動パターン

- ・一貫して高水準の周術期ケアを行っている
- ・適切な疼痛管理が適切な時期に行われることを保証する
- ・外科的疾患の発症時や外科的介入からの回復期の併存症による影響を常に考慮している
- ・患者の状態に応じた調節を含めて、水分、電解質、血液製剤が適切に投与されることを保証する

1-2) 診療内容をモニターして評価する：良い行動パターン

- ・外科医の監査やピアレビューに積極的に参加する
- ・自身の結果を同じ診療科の同僚やコミュニティ内の別の外科医、好評文献の結果と比較する
- ・「問題のある」事例についてレビューして議論する
- ・有害事象についての根本原因分析やその他のレビューに参加する

1-3) 安全とリスクを管理する：良い行動パターン

- ・必ず患者の術前評価を適切に実施する
- ・可能性は低いが発生すると重大な影響を及ぼす問題を認識して、発生時に備える
- ・規則に従った手洗いなど、適切な無菌操作を実

践して感染リスクを最小化する

- ・手術時の安全チェックリストなどのリスク低減策の実践に進んで関与して遵守する

このカテゴリーは、テクニカルスキル領域であるが、ノンテクニカル要素も多く含まれている。術後の患者の容態には細かなバリエーションがあり、それが許容範囲内であるかどうかを判断するには、それなりの経験を要する。患者と共にある姿勢は、患者を十分に観察することから出発し、同時に十分な疼痛管理にも通ずる。こうした患者管理の体験は、さまざまなパターンを蓄積することにより、認識主導型の意志決定を容易にするが、独りよがりのものにならないためには、ピアレビューに晒される必要がある。知らないことや判らないことを隠さず、周囲の意見を良く聞くことにより、自らの実力不足が補われて、人間的にも成長する。

ピアレビューによる検討は、伝統ある教育病院など、信頼される医療組織では、死亡患者症例検討や臨床病理検討会などの仕組みがあるが、近年は病理解剖数の減少も相まって、こうした検討会が少なくなっている。自らが執刀した症例についての検討には、それなりの経験年数が必要になるが、手術の結果の検討を怠れば、合併症という言葉に逃げ込んで、より高水準の医療を提供できなくなるであろう。

また忙しい臨床現場では、安全のためのチェックは煩雑に感じられるかもしれないが、習慣化することが肝要である。手洗い方法は、昨今スクラブ法など簡略化されるようになってきたものの、全員が同じ方法をとらないと、感染制御レベルは最低限に揃うので、いつでも規則に則った行動が求められる。

2. 臨床判断と意思決定

2-1) 選択肢を考慮する：良い行動パターン

- ・対応すべき問題を認識して明確化する
- ・チーム内の関係のあるメンバーと、選択肢についてバランスのとれた議論を行う
- ・外科医や患者にとって適切と判断した状況では、セカンドオピニオンを求める
- ・患者の自己決定権を尊重する

2-2) 前もって計画する：良い行動パターン

- ・予定手術の一覧を作成する際に、手術や麻酔に関する問題によって生じうる遅れを考慮に入れる
- ・緊急時に必要となる備品を特定してその有無を確かめるなど、緊急時の対応準備が整っていることを確認する
- ・決断力があり、時機を逸することなく決定を下せる
- ・必要になる術後ケアの水準を判断して、適切な機器類を確保する

2-3) 決定事項を実施してレビューする：良い行動パターン

- ・決定事項を適切な時間の枠内で遂行する
- ・患者の状態の変化に応じて計画を再考するとともに、問題発生時にも再考する
- ・必要に応じて支援を求める
- ・検査結果や手術検体の病理報告をルーチンにフォローアップする

この臨床判断は、テクニカルスキルとノンテクニカルスキルの境界領域である。判断の前に、状況を正しく認識することが基本であり、治療の選択にあたってはすべての選択肢を考慮し、必要な議論をチーム内外で行う。不作為（意図的にやらないこと）や自分の興味や好き嫌いによる独善的

な決定は、他の因子のプロフェッショナルリズムや保健活動の擁護にも抵触する。前もっての計画を、不測の事態もできるだけ考慮し、周到に立てることは、チームの中で学ぶ次世代の良い見本となる。決定事項を遂行後に、その結果を振り返ること（デブリーフィング）は、医療の質を向上させる。これは実際の現場では忙しさのあまり省略されることが多いが、ノンテクニカルスキルの向上のために習慣化したい項目である。

3. 専門の技術知識（テクニカルスキル）

適切な外科手技を安全かつ効果的に遂行する。

3-1) 手術が必要なことがあることを認識する外科的介入が適応となるかどうかを理解して行動する：良い行動パターン

- ・複雑な症例や難しい判断に直面したら、対等な立場の同僚や他のスタッフに相談する
- ・外科的な問題を含めた診療上のあらゆる面に対して常に疑問を持ち、選択した方法の正当性を検証する
- ・緊急の状況であれ待機的な状況であれ、手術の必要性和時期を考慮して、適切に優先度を判断する
- ・直ちに手術を行うよりも更なる評価、観察、検査を行う方が望ましい状況を認識できる

3-2) 器用さと技術を維持する/自身の経験と患者の状態の性質に応じた適度な水準で、健全な外科的技術を一貫して発揮できる：良い行動パターン

- ・適切なプロセスを踏みながら新しい技術の習得に努める（経験豊富な専門医の下を訪れる、メンタリングを利用するなど）
- ・状況に応じて、シミュレーション訓練などのテクニカルスキルの評価活動に参加する
- ・自身の加齢、身体的障害、手先の器用さの限界

などを考慮して臨床での業務内容を調整する

- ・執刀医、助手、その他のスタッフが針刺し事故に遭うリスクを最小化するための方策を採用する

3-3) 自らの業務範囲を確定する/自身の訓練経験と専門技能のほか、利用可能な機器類、状況、人員なども考慮して、その条件に適した手術を施行する：良い行動パターン

- ・個々の病院の状況を考慮に入れて、決められた診療範囲内のサービスで対応する
- ・自身の限界と他者に助けを求めるべき状況を把握しており、通常の対応範囲に収まらない病態の症例は他の医師に紹介する
- ・通常の診療範囲に収まらない困難な問題に遭遇したときは、助言や支援を求める
- ・現状の経験に応じて、自身の診療範囲を修正する

専門の技術と知識は、テクニカルスキルそのものである。手術方法に知悉しているだけでなく、一つ一つのテクニックを確実にすることが望ましい。糸結びに始まり、各種の手術器械の取り扱いに習熟するとともに、器械を大事に扱うことは外科医の責務といえる。また自らの興味に基づく独善的な行動は、患者にとっての最善の医療を逸することになる。ある手技を自分が得意としている場合、治療の適応を自分に都合の良いように拡大し、得意手技の対象としてしまうことも同様である。テクニカルスキルの未熟さは、努力と修練によって改善される可能性があるが、人の言うことに耳を傾けない行動は、多職種協働とチームワーク領域のノンテクニカルスキルの欠如であろう。

4. プロフェッショナルリズム

倫理的な外科診療を通じて患者、コミュニティ、プロフェッションへの献身を示す。

4-1) プロフェッショナルの自覚と見識を持つ/自身が行っている外科診療について振り返り、患者、同僚、研修医、コミュニティに対する意味を認識する：良い行動パターン

- ・他のスタッフや患者に対して丁寧な態度で接する
- ・質問や提案、客観的批判に対して建設的に対応する
- ・自身のエラーを認める
- ・不良な転帰について自分の責任を認め、振り返りと改善の機会を活用する

4-2) 倫理的であり誠実である/倫理、誠実さ、秘密保持の基準を常に満たし、患者、家族、介護者の権利を尊重する。

- ・他のスタッフにとって倫理的なロールモデルになる
- ・すべての研究プロジェクトが研究倫理委員会による審査と承認を確実に受けるようにする
- ・慎重を要する侵襲的な検査・治療を施行する際には、事前に患者のインフォームドコンセントを求める
- ・患者との間に個人的および性的な面で常に適正な境界線を保っている

4-3) 自らの健康と生活を維持する/自身の健康と福祉を維持するとともに、同僚、スタッフ、チームメンバーの健康面および安全面のニーズも考慮する：良い行動パターン

- ・自分のかかりつけ医を定めて定期的を受診し、さらに必要なときにも受診する
- ・規則的に休息と休日をとる
- ・同僚や若手スタッフの健康状態を尋ねる

- ・余暇の活動を楽しみ、手術以外のことにも関心を持つ

本カテゴリーは、医療を天職とするものではなく、医療以外の領域のプロフェッショナルにも共通した考え方といえる。別の言葉で言えば、プロフェッショナルな社会人としての基本的な素養であろう。日本語でも「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という諺があり、人格識見と実力のある人物は、周囲の人間に敬意を持って対し、自らの失敗を認める謙虚さも持つ。さらに個人の精神的肉体的コントロールも、業務遂行能力に影響するので、自分の「状態を認識して」自らを最も良い状態にして参画したい。ちなみに「医者の不養生」という諺は、ラテン語にも存在する（*Medice, cura te ipsum!* = *Physician, heal thyself!* 《医者よ、汝自身を治せ》）。

本来の医療プロフェッショナルリズムは、RACSの掲げた外科医の9つの能力のすべてが関わっていると考えるべきである。ちなみに2002年に米国内科専門医会・米国内科学会・欧州内科学会が共同作成した「新ミレニアムの医療プロフェッショナルリズム」では、プロフェッショナルとして10の責務が規定されている。プロとしての能力維持、患者への正直さ、守秘義務、適切な患者関係の維持、医療の質向上、医療アクセスの向上、医療資源の適正配置、科学的知識、利益相反の開示、専門職としての責任を果たすこと、が提示されており、医療職が集団としてなすべきことも挙げられている。

5. 保健活動を擁護すること

個々の患者、家族、介護者、コミュニティが有する医療上のニーズと期待を特定して対応する。

5-1) 患者に共感し患者権利を尊重する/患者の権利、選択、尊厳、プライバシー、秘密に対して敬意を持って接しつつ、最適な医療を提供する：良い行動パターン

- ・患者が様々な見解や意見を求めることを奨励し、複数の選択肢から選ぶことを促す
- ・患者に思いやりを持って丁寧に接し、意思決定への関与を奨励し、患者の選択を尊重する
- ・患者のプライバシーに配慮して尊重する態度を示す
- ・苦痛を感じている患者により多くの時間を割き、患者の懸念に積極的に耳を傾ける

5-2) 患者・介護者・家族と交わる/計画や意思決定に患者を関与させ、さらに適切であれば家族や介護者も引き入れて、それらの人々のニーズや期待が最適な形で満たされるよう尽力する：良い行動パターン

- ・患者と介護者のニーズを考慮して検査と治療を計画する
- ・手術の計画と見込みについて、患者の家族と十分なコミュニケーションをとる
- ・紹介した患者も引き続きフォローし、経過の報告を求める
- ・十分な時間を確保して治療に関する患者の懸念や不安を聞き出す

5-3) 文化的・地域的な要請に応える/外科診療に文化、民族性、スピリチュアリティが及ぼす影響を理解し、患者が属するコミュニティにみられる健康面、社会面、経済面の幅広いニーズを考慮する：良い行動パターン

- ・医療サービスへのアクセスを改善するために努力する
- ・資源の乏しいシステムにおいて、コミュニティにみられる医療上の多様なニーズを認識する

- ・コミュニティの教育と発展に貢献する
- ・文化的および言語的背景から生じる問題に対処する

専門職においては、情報の非対称性（専門職側が一方的に圧倒的情報を持っている状態）を補う努力が不可欠である。専門的な事柄を、一般人にわかりやすく説明していくことは、当該の専門領域の必要性を社会に認めてもらうことに繋がる。診療に当たっては患者のみならず、介護者や家族、そして地域や社会にまで視野に入れる必要がある。WHO（World Health Organization, 世界保健機関）が、2011年にすべての医療系学生を対象とした「患者安全カリキュラムガイド多職種版」を公開したが、その中の第8トピック「患者や介護者と協働する」では、文化能力（自分以外の文化を理解する能力）についての記載がある。すなわち文化・民族・宗教的背景は、患者安全には直接的な影響は少なそうに見えるが、こうした社会的背景に対する配慮を欠いたまま放置しておくと、患者有害事象や医療事故が発生した場合には、患者側の感情を非常に悪化させる。なお本ガイドでも社会活動にも加わることの重要性に対しても言及がある。

6. コミュニケーション

質の高い医療の提供を促すために、患者、家族、介護者、同僚、その他の人物と効率的にコミュニケーションをとる。

6-1) 情報を収集し理解する/病棟または外来や手術室でのコンサルテーションの際に適切なタイミングで正確な情報の提供を求める：良い行動パターン

- ・すべての関連文書（メモ、検査結果、同意書も

含む)を確実に参照できる状態にし、確実にレビューを行う

- ・情報の重要性について熟考して議論する
- ・麻酔計画について麻酔医と連携し、手術中も定期的に状態を確認する
- ・手技の実施中は常に患者の状態をモニターし、変化や問題点に適切に対応する

6-2) 選択の自由について議論し伝える/選択肢について患者と話し合い、決定事項を明確かつ効率的に伝達する：良い行動パターン

- ・話し合いで決定し、その内容を明確に伝達する
- ・別の選択肢や考えられる転帰について準備し、それらを伝達する
- ・その患者で予想される臨床経過について患者、家族、関係スタッフに情報を提供する
- ・決断力があり、管理について明確な目標と計画を設定している

6-3) 効果的なコミュニケーションを行う患者、家族、介護者、同僚、他のスタッフと情報を交換する：良い行動パターン

- ・検査結果をフォローして患者に適切に伝える
- ・手術チームの関与や質問を促し、自身の情報に価値があるということをチームのメンバーに実感させる
- ・悪い知らせを告げるときに同情と共感を示す
- ・自身と異なる文化的背景を持つ患者にも認識と思いやりを示し、適切に通訳を利用する

コミュニケーションは、ノンテクニカルスキルにおける最重要の要素である。ここでは外科医同士、チーム、他科の医師、他職種のスタッフ、患者や家族など、外科医が職務に関わるすべての人間とのコミュニケーションが説かれている。一般的にはコミュニケーションとは、情報の伝達を中

心として意思の疎通や情動の共感をも含む概念である。本カテゴリーにおいては、情報の送り手が誰に対して何を発信し、情報の受け手からどのような応答があったかという過程において、どのような情報が共有されたかが問題となる。特に医療者と非医療者の場合は、情報の非対称性に留意して、患者が最良の選択ができるような情報提供が望まれ、そのためにはコミュニケーションが双方向性にならなければならない。

そもそも人間関係は、言葉や記号の交換によって成立しているため、他者に伝えることのできる情報は、言語化されたものだけである。情報を漏らさず正確に伝達するためには、口頭にせよ文書にせよ、明確に言語化がされる必要がある。米国の医療機能評価機関である Joint Commission は、患者安全目標の中の「医療者間コミュニケーションを有効にするハンドオフに関する細則」6)で、「そのための時間を確保し、最新情報を交換し、復唱などにより確実にし、他情報も参照しつつ、中断させないこと」を挙げている。ハンドオフとは、情報とともに責任も受け渡す行為であり、これを情報の送り手も受け手も認識しなければならない。

7. 多職種協働とチームワーク

安全で有効かつ効率的な手術を行うために、対等な立場の同僚、研修医、その他の医療専門職と協働して、臨床状況についての共通の見通しを形成し、業務を適切に委任することができる。

7-1) 情報交換し記録する/適当なタイミングで知識と情報を交換し、チーム内での共通理解の確立を促進する：良い行動パターン

- ・同じ部門や診療科のメンバーに対して同等な権限を持ったプロフェッショナルとして接する